# 信毎歌壇

## 小池　光選

ティンパニー息子連打の熱気おびチャイコフスキー五番終章に入る　（長野市）近藤　光子
何故叱るそう言いたげに怪訝なる顔して我を見上げる犬よ　（佐久市）小泉　英介
数々の葛藤ありし夫なれど病に伏せば愛しさの湧き　（泰阜村）松島　房子
客用に先祖が揃へし朱の御膳納屋の隅にて塵に埋もれる　（御代田町）柳沢　光雄
そよ風がカーテン揺らす窓辺には猫がまどろむ我もまどろむ　（長野市）北沢　京子
縁側で一人ぼっちのひなたぼこ遠き山並送電塔立つ　（中野市）小林かつ子
ゼレンスキーに白き顎髭目立おり背広姿はいつになるのか　（駒ケ根市）塩沢　春子
夕立の去りてきらきら蟬恋の珠のやうなる高原レタス　（小諸市）加藤　陽介
田に水が入れば蛙合唱す青春謳歌するがごとくに　（飯綱町）坂井　寿男
こしあぶらごみ筍数本を弟置いてく朝風の中　（長野市）松本　博人

### 佳作

おばあちゃん音楽会を見にきてねわたしのソロのパート聞いてね　（千曲市）荒井よし子
こしあぶら熱々天ぷら供えると写真の父が微笑み返す　（伊那市）赤羽　正彦

**選評**　第一首、息子さんがオーケストラでティンパニーをたたいているのだろう。チャイコフスキーの交響曲第5番、演奏はいま佳境に入る。母の心境いかばかり。第二首、犬はたしかにこういうふるまいを見せるときがある。人間よりも人間くさい。愛犬家ならではの歌。第三首、長い歳月をともにした夫婦。いろんなことがあったが病めばいとしさが湧く。はやく治ってほしい。長生きしてほしい。

## 小島　なお選

あざやかなみどりを洗ふ五月雨ランドセルの銀の留具懐かし　（安曇野市）東野　行岳
晴れわたる空見上げたら噴水が立ち上がる音、背景となる　（大阪市）川田ゆかる
四十年前に始めたわたしたちおばあちゃんですと語り部かたる　（千曲市）大谷　善邦
真つ黒な梁を這ひゆく青大将平気で寝てた四人の家族　（千曲市）たじまたける
五センチの踏み台にのり調理するあの頃の母思い出す初夏　（長野市）荒川智恵子
分担し斜面のノート埋めていく6才つぶやくむずかしいなと　（佐久市）橋詰美代子
糊を煮て桟を洗って障子張る三年前と同じにできた　（東御市）増田　栄子
夢の中「おいしいおやきコンテスト」野蒜みそ入れみごと特賞　（長野市）島田　怜子
天井の裏にまします守り神梁渡らんと五尺を伸ばす　（箕輪町）向山　政俊
帰宅して米研ぎ仕掛け風呂に入る単身赴任の夜のスタート　（佐久市）三石　俊司

### 佳作

右側の1／3故障でも動く心臓労りさする　（長野市）金井　秀保
こしあぶら木曽路巡りて採りたると軽トラの友足引き来たる　（伊那市）堀米　好美

**選評**　第一首、みずみずしい青葉と子どもたちの姿。ささやかなものへの着目が一首をきらりと光らせた。第二首、視界の全景だった青空が、噴水の背景にまわる。句点の作りだす一瞬の転換のリズム。第三首、40年が彼女たちをおばあちゃんにしたのだ。時間をゆたかに継いでゆく語り部の活動。第四首、眠る家族の上を渡る青大将。見えないものの気配がまだ暮らしのなかに息づいていた時代。

## 米川 千嘉子 選

減反の田毎に実る麦の秋世の米不足こころ騒がし　（伊那市）竹松　徳門
音のなきEV車街に出始めてすでに白杖傷めし人も　（千曲市）上原　博司
「九九の表」作りて母は壁に貼る我小一の初夏の香の頃　（長野市）松本　博人
亡き夫の形見の補聴器良く聞こゆ見守りくるる夫の声聞こゆ　（伊那市）松崎りつ子
雛たちは聞いているらん家主らのよもやま話親を待ちつつ　（佐久穂町）石田　弘子
知らぬ間にわれより世智を身に付けし娘に諫められ草を引く庭　（飯山市）市村紀久子
猿害に祖父母が植ゑし山畑の柿の木二本謝して伐りたり　（木曽町）新村　亮三
波音も潮のかをりも知らぬ我なぜ海恋うる母を亡くせば　（東御市）渡辺美保子
憧れのあの子に見つけて欲しかった「隠れん坊」の昭和遠かり　（上田市）小林さよ子
歩けなくなったら私どうしよう俺が負ぶうと真顔で爺は　（長和町）羽毛田　栄

### 佳作

寄付額は一円二円と読みてとれ聞き覚えある人の名もあり　（麻績村）小山みよ子
我の横亡き甥に似た若人が新緑の中過ぎ去っていく　（千曲市）宮坂志寿伽

**選評**　第一首、「田毎に実る」のは麦。なぜこんなことになるのか。生産者、消費者ともに「こころ騒がし」。米不足、米価高騰は解決に向かっているか。第二首、エンジン音の聞こえない電気自動車が増えた。そのことの「不便」にはっとする。第三首、教育熱心な母だったのだ。いろいろな「初夏の香」が想像される。第四首、身につける形見は亡き人が実際に助けてくれているよう。